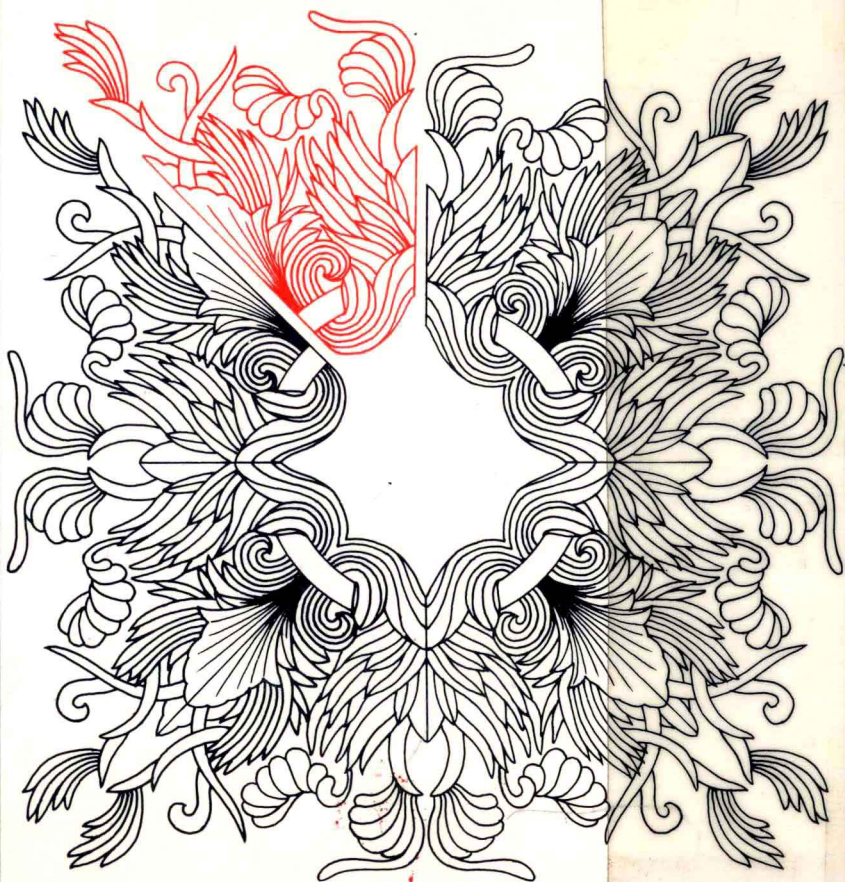


叢書・ユニベルシタス

クルティウス=シット"往復書簡

H./J. M. ディークマン 編

円子千代 訳



クルティウス = ジッド 往復書簡

H./J.M. ディークマン編
円子千代訳

訳者紹介

円子千代 (まるこ ちよ)

東京大学文学部卒業

前共立女子大学教授

著書：『フランス文学史ノート』(共著)

訳書：M. ロベール『古きものと新しきもの』(共訳)

ギタール『フランス革命下の一市民の日記』(共訳)

A. モロワ『鏡の前のフェンシング』(共訳)



叢書・ユニベルシタス

クルティウス＝ジッド 往復書簡

1985年2月25日 初版第1刷発行

H./J. M. ディークマン編

円子千代 訳

発行所 財団法人 法政大学出版局

〒102 東京都千代田区富士見 2-17-1

電話03(237)1731／振替東京6-95814

製版、印刷・三和印刷／鈴木製本所

© 1985 Hosei University Press

1398-11153-7710 Printed in Japan

目次

編集注記 1

第一部

エルンスト・ローベルト・クルティウス
アンドレ・ジッド および

エルンスト・ローベルト・クルティウス
シャルル・デュ・ボス 往復書簡集

序文 5

クルティウス⇌ジッド 往復書簡集

補遺A デジャルダン⇌ジッド 220

補遺B ジッド⇌スペンダー 221

補遺C シュランベルジェ⇌ウルゴン 222

3

17

クルティウスⅡデュ・ボス 往復書簡集(抄)

225

補遺A プルーストⅡクルティウス

281

補遺B シュランベルジェ

292

第二部

エルンスト・ローベルト・クルティウスⅡ

ヴァレリー・ラルボー 往復書簡集(抄)

297

序文 299

クルティウスⅡラルボー 往復書簡集(抄)

303

付録1

ポール・ヴァレリーのエルンスト・

ローベルト・クルティウス宛書簡四通

323

付録2

エルンスト・ローベルト・クルティウス

「シャルル・デュ・ボス」

329

訳者あとがき

357

編集注記

三つの往復書簡集は原文のまま書き写された。書簡の大部分については、われわれは原文を所有していた。ただしいくつかの場合、些細な変更を行なった。文章をより明瞭に、より正確にするために句読点を加えた箇所もある。略語について、その語あるいは文章は（あるいは固有名詞についての場合が多いが）その省略以前の綴りになおしておいた。固有名詞の表記の誤りは訂正した。ジッドは Saint Evremont を《Saint Evremont》、Stefan George を《St. Georges》、Vienot を《Viennot》と書いている。デュ・ボスは Scheler を《Schäler》と書いている。クルティウスはドイツ語の ie の e をしばしば書き落している（たとえば formulieren の代りに formuliren のように）。われわれはこれらの問題に会う度にテキストを訂正した。

H・／J・M・ディークマン

4 Octobre 45 -

(†) Je m'a dit qu'il était possible que
votre message parvienne au
bureau de vos amis parvenant au
recueil de vos chroniques du Figaro.

Cher ami retrouvé

Vos messages ont été transmis
tout aussitôt, par téléphone, à
Jean Schlumberger^(†). C'est le seul
de nos amis communs que je
pouvais atteindre ainsi. Mme Théo
est présentement à Colpach,
auprès de Louis, dont les dernières
nouvelles étaient bonnes. Je leur
communiquerai au plus vite
votre excellente lettre, qui
m'a profondément ému. Elles
seront très sensibles à votre
souvenir de Pierre Vieux, que
nous ne cessons pas de regretter.
Je ne sais si Andrée est
auprès d'elle, ou dans

第一部

エルンスト・ローベルト・クルティウスⅡ アンドレ・ジツド
およびエルンスト・ローベルト・クルティウスⅡ シャルル・
デュ・ボス 往復書簡集

序 文

最初に私はイルゼ・クルティウス女史に感謝の意を表したい。女史はエルンスト・ローベルト・クルティウスがフランスの友人たちと交した書簡の公表を決意され、注を付した書簡集のかたちでの出版を私に依頼された。カトリクス・ジッド女史は、アンドレ・ジッドからクルティウスに宛てた書簡の公表を許可された。プリムローズ・セプ女史は父君シャルル・デュ・ボスの書簡の公表を諒解された。ヴァレリー・ラルボーからクルティウスに宛てた書簡は、ヴィシー市の記録保管所に収められていた。これを公表することは、ガストン・ガリマール氏と、同保管所の主任司書モニック・クンツ女史によって許可された。われわれは上記の方々に感謝の意を表する。

私はまた最初にエルンスト・ローベルト・クルティウス・シャルル・デュ・ボス書簡集の公表を考えられたミシエール・ルルー嬢にいまその特別な恩義に応えることができたことをよろこんでいる。同嬢は、必要な資料を管理して

おられたクルティウスの側およびデュ・ボス夫人から、この企画を実行する許可をえていたのである。ルルー嬢はクルティウス宛のデュ・ボスの手紙の書写にあたられていたが、デュ・ボスの書類を研究しているうち、デュ・ボス宛の新しい書簡と両者の文通に関して貴重な情報を発見された。同嬢はシャルル・デュ・ボスについての重要な研究を準備中で、その研究はソルボンヌ大学の博士論文として提出される予定であった。同嬢が論文を準備していた数年にわたって、ルルー嬢と私は同嬢の研究が喚起した問題についてしばしば論議した。同嬢はときおりデュ・ボスとクルティウスに関する情報を私に求めた。論文の教章が完成され、一九七六年にはジャンおよびマッジ・ムトンの好意で、論文の一部がデクレ・ド・ブルヴェール社から『シャルル・デュ・ボス、近似値と確実性』という表題で出版された。

『アンドレ・ジッドとの対話』の起源」と題する一部は、最初、一九七二年七月二一日―二六日のスリジ・ラ・サル国際文化センターが組織した討論会で、ミシエール・ルルー嬢によって発表された。この討論会のあいだ、われわれが散歩していたあるとき、ルルー嬢は私に、健康上の理由で自分はクルティウス・デュ・ボス往復書簡集の編集と

いう自分の企画を実行できないだろうと打ち明けた。討論会が終ったあと、ヌイイで、同嬢は所有している書簡を私にあずけた。彼女はデュ・ボスの手紙のコピーとデュ・ボスの書類のなかで発見された資料によってクルティウスの書簡の蒐集を完成していた。ミシエール・ルルー嬢はまた「シャルル・デュ・ボス友の会」の秘書役をもつとめ、その資格において「カイエ・シャルル・デュ・ボス」(一九一九)を刊行した。一九七五年六月五日、死が彼女を長い残酷な苦痛から解放した。彼女が先駆者であった書簡集は彼女の思い出に献げられるものである。

エルンスト・ローベルト・クルティウスとアンドレ・ジッドおよびシャルル・デュ・ボスとの往復書簡は二重の興味をもっている。これは個人的な資料であると同時に、第一次大戦から第二次大戦に至る時代の文学的、芸術的証言でもある。ジッドとの手紙の交換は一九五〇年にまで及んでいる。われわれはそこに二人の文通者の生活、思想、作品についての知識と同時に、とりわけ二〇世紀前半におけるフランス文学、ドイツ文学、イギリス文学についての知識をうるができるのである。両者はまた政治的事件、

宗教、芸術一般についての個人的見解をも表明している。両者の書簡はよく彼らの時代の文化的雰囲気を再現しているのである。

クルティウスとジッドの文通と個人的交際は、クルティウスとデュ・ボスの場合とは非常に異った状況のなかで始まった。ジッドとの往復書簡は全体にデュ・ボスとの往復書簡より量が多く、より多様であることを付記しておく。

ジッドとの文通は、第一次大戦終了の二年後、フランスとドイツに文化的接触が再開された早い時期に始まっている。二か国間の政治的関係はまだ緊張していて、数通の書簡が示すように、その緊張はときにはジッドとクルティウスのヨーロッパ精神に影響を及ぼすまでになった。両者の最初の接触は一九二〇年八月一日のクルティウスの書簡によって確立された。クルティウスはこの書簡のなかで『田園交響楽』の一部を寄贈されたことに感謝している。

当時クルティウスが書いていたのはフランス文学の教授としてであり、その関心はとくに、ジッドがその主要な代表者のひとりであった現代にむかっていた。すでにクルティウスはその著書『現代フランスの文学開拓者』(一九一九

年)のなかで、ジッドの主要な作品に一章をささげていた。彼はそこでたんにテーマと形式について語っているばかりではなく、それらの作品を現代フランス文学の代表的記念碑とみなしている。ジッドの作品のいくつかは一九世紀に出版されているが、それにもかかわらずクルティウスはジッドを現代フランス文学のもっとも重要で、もっとも多様に富む「開拓者」であり代表者であるとみなしている。ジッドが彼自身の作品にあたえた主要な意味付けについてはのちに語ろう。

ジッドは『文学開拓者』の諸研究についてよく知っていた。彼の注意をこの著作にむかわせたのは、おそらくマイリッシュ夫人、ルクセンブルクの大実業家エミール・マイリッシュの夫人であろうと思われる。彼女は一九二〇年一月一日の「新フランス評論」誌で同書を論評している(ペンネーム、アラン・デポルト)。マイリッシュ家のひとびとはフランスとドイツの中間に位置するルクセンブルク大公領コルバハにある所有地で生活していて、第一次大戦後ヨーロッパの交流に大きな役割を果たした。クルティウスは最初の書簡のなかで、なぜ彼が当時その著書をジッドに送らなかったかを説明している。彼は、ドイツ人として

フランスに対して一定の慎みを保つべきだと考えたのであった。われわれはここに第一次大戦後のヨーロッパの政治的風土の一つのモデルと、フランスとドイツとの接近の試みを複雑化した感受性の一つの意味深い実例を見るのである。

ジッドがガリマール出版社で、また「新フランス評論」誌——ガリマールによって出版されていた定期刊行物——の編集で占めていた重要な位置は、クルティウスとジッドとの関係に意味深い役割を演じた。ジッドはクルティウスに雑誌とガリマール出版社のもっとも重要な作品を送らせた。彼はまた、他の出版社に拠って発表していた友人の作家たちに、その作品をクルティウスへ送るようにすすめた。やがてクルティウスはジッドの親しい友人のサークルに入れた。そして当時のパリにおける文学生活のもっとも重要な中心との交流はクルティウスに、ドイツの大学で教鞭をとるロマンストたちのなかでもユニークな位置を占めさせることになった。

新しい関係が生れたのは、のちにクルティウスがジッドの作品のいくつかを独訳したときである。ここで注意しておきたいのは、彼は当時ジッドの作品の意味を文字通りに

解釈したこと、完全な善意をもって読み、ジッドの友人の幾人かがとくに強調したようないくつかの作品のひそかな、あるいは、隠された意味を見ることがなかったことである。この善意はのちに触れるジッドとデュ・ボスとの対立に際してクルティウスがとった立場をある程度説明するものである。

クルティウスとジッドとの文通は第二次大戦によって中断され、一九四五年一〇月によりやく再開される。しかし両者はこの時期の終り頃には互いの様子に無知ではなかった。フランスとドイツの知識人の接触は第一次世界大戦の後よりもはるかにやすく、迅速に確立した。抗争は二つの国民の政治的、文化的、知的競争をたちまち通り過ぎて行ったのである。

一九五一年のジッドの死まで、二人の友人は定期的に出会い、文通した。この期間にクルティウスは『テゼ』を翻訳した。この翻訳に関する往復書簡は、作品について、および現代の翻訳が提起する問題について、きわめて興味深い考察を示している。往復書簡はまた共通の友情を明らかにしている。最初クルティウスの書簡は学生が教授に対するような、あるいは弟子がその師に対するような、うやう

やしい態度をうかがわせる。接触と文通の歳月の後に、書簡は真の親密さ、相互の敬意、深い友愛に満ちた感情を表している。

クルティウスとデュ・ボスの文通はよりやく一九二二年に始まるが、個人的な接触はかなり以前から行われた。クルティウスがデュ・ボスと知り合ったのは、一九〇四年のベルリン訪問の際であり、一八七〇—一八七一年の戦争は忘れられ、第一次世界大戦に至る緊張はまだ存在していなかった時期である。デュ・ボスはクルティウスがよく利用したパンシヨン・ブランに滞在していた。彼らはまたレブシウス家とジンメル家の文学的芸術的サロンで出会った。クルティウスはこの出会いを一九五二年に書かれたシャル・デュ・ボスについての最後の評論で回顧している。

この出会いののち、両者の交際は途絶え、——それと予期せず——一九二二年ボンティニーで、「名譽の鏡」をテーマとする夏の第二回十日会^{デカール}で再会した。長い別離にもかかわらず、両者の親密な関係はただちに復活した。ドイツの知的芸術的生活における偉大な時期の共通の記憶が、大戦後の不快感を消した。シャルル・デュ・ボスとの関係の

なかに、われわれは国粹主義的な性質のどのような緊張も、ジッドとの文通の初めに見られたような、あの一般的な不快感のいかなる痕跡も見出すことがない。この意味でわれわれは、『アンドレ・ジッドとの対話』の刊行によって惹起された緊張の危機的な時期までの両者の友情の恒常性を記すことができるであろう。しかし交歓の断絶はきわめて短期間であった。なおクルティウスはそのジッド宛の手紙が示すように、国粹主義的反動について懸念していたことを付記しておこう。ベルリン時代の一友人、そしてポンティニーにおける会談のあいだ主要な役割を演じた一友人の存在は、特別の意味をもっていたのである。

クルティウスはデュ・ボスとともに英文学、とくに一九世紀の英文学に深い讃嘆の念をいだいていた。両者はともに英語を話し、手紙のなかでしばしば英語を使った。デュ・ボスの文学的な精神と趣味はイギリスの文化によって形成されたのであった。彼はオクスフォードで一年をフェロウ・オブ・ベリアール・コリッジとして過ごし、彼のイギリスの友人たちの文化との接触を維持しつづけた。

両者の往復書簡の調子はずねに友愛的で屈託のないものである。ごく初期の書簡をのぞけば、クルティウスはつね

にデュ・ボスを親しげに洗礼名で呼んでいる（彼はジッドに対しては長いあいだ「ムシュー」または「シェール・ムシュー」と呼びかけている。彼が「シェール・アミ」とジッドに書くのはかなり後になってからである）。ジッドはクルティウスの眼には大作家、彼が尊敬し、ドイツの読書界のために翻訳する作品の有名な著作者と映っている。クルティウスとデュ・ボスが相互の作品に対してもつ評価は、両者の関係にはほとんど影響をあたえていない。ただ『アンドレ・ジッドとの対話』の出版だけが両者のあいだに一時的な冷却を生じさせたのである。

われわれはここで、クルティウスとデュ・ボスのあいだの個人的な関係を際立って明らかにする事件を述べておこう。一九二九年の秋にパリを訪れた際、クルティウスはジッドとの昼食に婚約者を伴って行く。ジッドはこの出会いについて、一九二九年一〇月三日の日記に「つぎのように書いている。「クルティウスに会いにフォワイヨへ行く。彼は私の知らない女性といっしょで、彼女を私に紹介しない。私は二人をメディシス広場のグリルルームへ連れて行く。フォア・グラ、シャンピニオン・ア・ラ・クレーム、回りの早い葡萄酒、夥しい煙草……クルティウスはいつもより

愛想がいい」⁸。この同じ滞在期間中にクルティウスはデュ・ボス家を訪ね、彼の婚約者を紹介している。訪問の後につづく書簡にはこの女性の旧姓が出てくる。

一九二九年六月にシャルル・デュ・ボスの重要な作品、『アンドレ・ジッドとの対話』が公刊された。これは文学的な批評であり、このなかでデュ・ボスはジッドの小説を非常に批評的センスをもって取扱った。この出版はデュ・ボスとジッドの不和を惹起し、三人の文通者のあいだの關係に危機を生じさせた。われわれはここではこの『対話』の起源について詳論することも、そこでジッドが演じた役割を分析することもできない。ただジッドが『対話』の大部分をその出版の数年前から知っており、彼の方から数回にわたって出版を依頼したことを言うにとどめよう。

二〇年代にジッドとデュ・ボスは定期的に会って、その友情の発端以来の対話をつづけた。デュ・ボスの日記は二人の頻繁な会合の、その意見交換の、その思想の一致を証明している。彼らはいっしょに『コリドン』の校正を行った。デュ・ボスはジッドの作品に対する尊敬をしばしば表明したが、それはまた二人の共感が冷却して行く時期で

もある。数年のあいだに両者の關係にはある距離が確立した。¹⁰

以前からデュ・ボスはジッドの作品を論考する準備を計画していた。彼がジッドの作品についての講義や講演を行っていた年にまでさかのぼる計画である。¹¹ 彼は一九二五年五月八日の日記に「ただちに『ジッド』について六篇の小説を作る」という彼の意図を記している。自分の否定的判断に不安を抱きながらも、彼は「対話」形式を選択し、扱うべきテーマを検討した。¹² 一九二七年四月に彼はこの本となおすべき事柄について語っているが、やがて七月には疲労とこの「労役」についての関心の喪失を歎いている。¹³ 一九二七年七月、カトリシスムへの回心の直前に、デュ・ボスはそのジッド論を完成する。デュ・ボスからクルティウスに宛てた二つの長文の書簡は、全般的に事件の年代記的推移と『ジッドとの対話』が成立するまでの継起的段階を後づけている。その後現れたデュ・ボスの日記はこの推移を確認し、事件の経過と段階をより詳細に表示している。

デュ・ボスを選んだ表題『対話』は、実際の対話での意味で使われていると同時に、その記述された形式での延長

という意味に理解できる。デュ・ボスは初めから彼とジッドとの関係にふざわしい表題と形式を選んだのである。しかし対話はしばしば釈明と論争の性格をおびた。それは議論、告発行為、弾劾になった。『対話』の第一部はジッドの作品の芸術的・文学的な局面の客観的で注意深い討論から成り立っている。要約すれば肯定的な批判である。しかし最終章は「透かし格子の迷宮」と題された長い章で、デュ・ボスがジッドにくわえた批判の大多数を再編成したもので、その批判はジッドと彼らの共通の友人たちのあいだに激越な反応を惹き起した。ただデュ・ボスの数人の友人だけが確執と「危機」の発端が一九二四年にさかのぼることを知っていた。危機発生のある要素は一九二四—二五年の日記（これは一九四八年まで公開されなかったが、一部分はそれ以前から知られていた）のなかに見出すことができる。デュ・ボスはジッドの小説に関する彼の見解を少しずつ変更して行った。そして時とともにジッドの小説の無道德的感受性と結論をよりよく理解するようになった。日記はまた彼が講義や講演のなかでけっしてジッドと彼のあいだにある緊張を窺わせることのないように決意していることを示している。この同じ資料はまた、ジッドとそ

の友人たち、かつてデュ・ボスをジッドに結びつけていた友情関係が悪化した原因はデュ・ボスのカトリック信仰への回心である、と主張するジッドの友人たちの告発を反駁してもいる。「彼はジッドの背後でいささかの救済を求めている」というヴァン・レイセルベルヘ夫人の言葉はジッドのサークルが示した反応の一例にすぎない¹⁴。この言葉は不公正で間違っているが、ジッドの人柄、思想、作品がデュ・ボスの回心（葛藤とみなさなければならない）に大きな役割を演じたことを認めるのは正しいとしなければならない。宗教的危機（葛藤的回心）の時期にジッドについての本を書くという考えは運の悪いことであった。実際、この回心はデュ・ボスに、自分はたんに自分の名においてばかりでなく、自分のカトリックの友人のためにも語っているのだ、教会の信徒の資格で語っているのだ、と確信させる役割を演じたにすぎなかったのである。デュ・ボスは結局はアンビヴァレントな諸観念を、宗教的感情と解釈し理解することができたのである。

デュ・ボスのジッド批判はなによりも彼の作品に照準を定め、その人格を標的とすることは稀であったとは必ずしも言えない。デュ・ボスは友人ジッドの私的品行を攻撃は

しないが、作品のなかでジッドが行った自己弁護や自己正当化に攻撃をひかえることはしない。デュ・ボスはジッドがそれらの自己弁護や自己正当化によって作品の芸術的価値を損ない、その品行のみならず、芸術的使命までも裏切ったと考えていた。¹⁵デュ・ボスの観念のなかでは『アンド

レ・ジッドとの対話』は、クルティウスが苦々しげにデュ・ボスを非難したように、ジッドの人格と生活の非難を意味してはいなかった。彼が攻撃したのは作家としてのアンドレ・ジッドであった。しかし実際にはジッドにとつては文学作品こそが第一義的な重要性をもつものであった。われわれはここではジッドの日記から二つの例を引用するにとどめなければならない。ジッドは一八九〇年三月一八日に書いている。「ぼくの頭脳は作品のことで一杯だ。作品が頭脳のなかを動き回っている。ぼくはもう読むことも書くこともできない。いつでも作品が書物と眼の間にわりこんでくる。これは耐えがたい精神的不安だ」。そして一九〇六年三月二四日、「ぼくは何物もぼくを妨げることが許さない。逆に、すべてがぼくに役立つことを望む。つまりすべてを利用したいのだ」¹⁶。デュ・ボスが『対話』を出版するかあるいはしないかという事態に直面した際のジッ

ドのためらいは、ジッドにとつて「作品」がもっていた大きな実存の意味によって説明できる。作品はジッドを正当とするであろう。この意味でクルティウスの判断「あなたは彼の本質を否定しているのです」は正しく、ジッドとその友人の反応も理解できるのである。

クルティウスへの二通の書簡のなかで、デュ・ボスは『対話』の出版に至った経緯を説明し、彼が受けた夥しい批判に答えようと努力している。読者は二通の書簡の文体の相違にとりわけ注目されるであろう。論証は直線的に、協道にそれることなく、思考の差異やニュアンスに配慮することもせずに、デュ・ボスがいつもは会話においても守っていたデリカシーや洗練もなく行われる。デュ・ボスが書いたあらゆるもののなかで大きな彼割を演じている年代の順序がここで正確さの頂点に達している。クルティウスとデュ・ボスの文通の到る処に見られる親密で友愛にみちた調子に代って、ここにあるのは弁護の形式性である。

この「危機」のあと、書簡はその友愛の関係を回復する。すでに述べたように、クルティウスはバリで婚約者といっしよにジッドに出会いながら、彼女をジッドに紹介しなかった。それに反して、未来のクルティウス夫人はデュ・ボ